2024年度「白百合 数理・データサイエンス・AI教育プログラム」

自己点検・評価報告書

2025年7月4日

白百合女子大学データサイエンス教育運営会議自己点検・評価部会

1. 自己点検・評価実施体制

プログラム実施主体「白百合女子大学データサイエンス教育運営会議」から選出された、情報教育センター所属教員を主なメンバーとする「自己点検・評価部会」が原則年に一度（6月）開催され、授業評価アンケートを元に授業内容について自己点検を行っている。結果は「白百合女子大学データサイエンス教育運営会議」に報告され、さらなる点検を行う体制を取っている。

2. 対象

2024年度に開講された選択必修科目「はじめてのデータサイエンス」（オンデマンド授業・2023年度以前入学者対象・全2クラス）および全学必修科目「はじめてのデータサイエンス」（対面授業・2024年度以降入学者・全12クラス）

3. 点検・評価項目

◆ 学内からの視点

（1）プログラムの履修・修得状況

2024年度より本プログラム対象科目「はじめてのデータサイエンス」を全学必修化した。その取り組みにより履修者数を増加させることができている。また、必修科目であるにも関わらず、選択必修であった2022・2023年度より単位修得状況は向上しており、授業内容の継続的な改善の効果ができていると考えられる。なお、2022年度本プログラム開講以来の履修・修得状況は以下の通りである。

表1 白百合 数理・データサイエンス・AI教育プログラム履修者数

学部	2022年度	2023年度	2024年度	累計
文学部	32	83	168	283
人間総合学部	29	64	192	285

表 2 白百合 数理・データサイエンス・AI 教育プログラム単位修得状況

学部	2022年度	2023年度	2024年度
文学部	75%	82%	84%
人間総合学部	83%	83%	91%

(2) 学修成果

学生からの視点としての授業評価アンケートおよび成績評価の両面から学修成果を把握している。アンケートでは「私はこの授業の到達目標を達成すべく、真剣に授業に臨んだ」という設問において「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」と回答した割合は 89% であった。また、「私はこの授業についてわからないことを質問したり調べたりして、その解消に努めた」において「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」と回答した割合は 84% となった。これらを踏まえ、主体的に本プログラムに取り組む姿勢が総じて高かったと評価できる。

(3) 学生アンケート等を通じて把握された学生の内容の理解度

授業評価アンケートにおける「私はこの授業の到達目標を達成できた」という設問に対し、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した割合は 70% であった。成績評価の面からも「S」および「A」評価を受けた学生は約 7 割に上ることから、学生の内容の理解度は高いと判断できる。一方で、到達目標の達成度合いについて「どちらともいえない」と回答した学生が 22% に上る点には留意しなければならないだろう。さらなる授業内容・教材の改善を図る必要があると思われる。

(4) 学生アンケート等を通じて把握された後輩等他の学生への推奨度

必修科目であることからアンケートに「他の学生への推奨度」に関する項目は設けていないが、「全体としてこの授業を受けて良かった」と答えた学生は「そう思う」と「どちらかと言えばそう思う」を合わせて 91% に上った。さらに、「私がこの授業で得たものは、今後の大学における学習活動に活きる」という設問でも「そう思う」と「どちらかと言えばそう思う」が 93% と高い水準を示している。

(5) 全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況

2024 年度からの全学必修化により履修者数は計画通り増加している。

◆ 学外からの視点

(1) 教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価

2022 年度開始時点では選択必修科目であったため履修者数も少なく、したがって本プログラム修了生の実質的な活躍状況調査が行えるのは数年先となる。しかしながら、2023

年前期に本プログラムを修了した学生が、MOS (Microsoft Office Specialist) 学生世界大会 2024 の Excel 部門で日本代表に選出され、文学部出身者ながら情報関連企業へと就職したことは企業からの評価の一例と考えてよいだろう。

(2) 産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見

2023 年度後期より、本学では「MOS・ビジネス統計スペシャリスト」CBT 試験の学内実施を開始した。本学の取り組みは、CBT 試験の実施企業である株式会社オデッセイコミュニケーションズの Web サイト（教育機関の活用事例）において次のように紹介された。

「白百合女子大学：時代の要請ともいえるデータ利活用・統計スキルを MOS とビジネス統計スペシャリストの学習を通して習得」

出典 <https://stat.odyssey-com.co.jp/case/edu02.html>

◆ 教育方法の工夫・改善

(1) 数理・データサイエンス・AI を「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること
授業評価アンケートでは「以前は、AI やパソコンに関して疎かったので自分の中で敷居が高いイメージがありましたが、身の回りの具体的な例などを挙げながら学習してみると興味を持つことができました。今後 AI がより身近な存在になっていくと思うので、自分でも学び続けたいです。」「講義を通し、社会で生きていくために理解し、活用し、使いこなす能力は不可欠であるという強い認識へと変わった。」といった、受講前後でデータサイエンスや AI に対するイメージがマイナスからプラスへと大きく変化したことがうかがえる自由記述が目立った。授業資料や授業内容を補うためのビデオ教材などの分かりやすさが評価されたものと考えられるが、一方で、特に復習の際、ビデオ教材ではなく担当教員や SA からの説明を求める声もあり、何らかの工夫が必要と思われる。

(2) 内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること

1 クラスをおおよそ 30 名前後の人数とし、かつ上級生 SA を各クラスに 1 名配置する体制を取っている。今後は受講生のみならず、SA の視点から授業改善の提案を受けるなど、多方面からの視点を取り入れることを検討したい。

4 総括

「授業の難易度」についてアンケートでは「とても難しい」と「やや難しい」との回答が合わせて 69%となったが、その一方で単位修得率は高く、また半数以上の学生が「S」または「A」の成績であることを考えると、内容・取り組みともに適切であると評価できる。学部間の修了率の差が何に由来するものであるかを分析し、それに応じた取組が今後必要となるだろう。

以上